獨客會

〔茶道筌蹄 一〕茶會

獨客　客待合に腰をかくるも、中央より下へさがりて席につくも同樣なり、主人の心得は、客の淋しくなき樣にもてなすを肝要とす、主人の座は茶點疊の末席に、座敷の勝手に隨ひ見はからふべし、料理は膳を客へ進め、手前の膳を持出し相伴する也、其後は通ひ用ゆ事例のごとし、偖通ひ飯器間鍋(カンナベ)を引とき、亭主煮物の椀を我膳へ乘せ勝手へ持行、勝手にて吸物を相伴するなり、又吸物まで相伴して、吸物椀を膳に乘せ勝手へ持行、湯を通ひに出さすもよし、偖通ひ吸物を引付勝手へ入る時、亭主間鍋八寸持出るもよし、通ひ盃を納め勝手へ入るとき、亭主吸物椀を膳へ乘せ勝手へ持入、湯を勝手にて相伴し、客の膳を下ぐるもよし、點茶の節、客より御手前も召上られ候やうなど挨拶ある時は、二人分の茶を點る也、客より右の挨拶なき時は、亭主より御相伴いたし候といひて二人分の茶を點べし、御手前と一禮して茶を呑むとき、亭主旦坐の半東のやうに座つく也、至て小坐敷ならば少し坐を進めてもよし、茶碗は手より手へ受取、帛紗をはずして呑む、客一禮すれば、茶碗を客の前に置き、帛紗をさげ、定座に歸る、

〔南方錄 二〕獨客之會

主客共に未熟の人不可叶、客腰掛に來らば早く迎入れ、或は懷石をも挨拶の上相伴し、或は中立の跡仕廻を急て、腰掛へ出て挨拶する類、色々主客共に心づかひ有也、後坐入の事、右の如く腰掛に一所に居る故、漸湯相能成申べし、御入あれと云て先に歸るべし、此時鉦抔不可打、雨雪の時、笠二ッ、圓坐をも二ッ置べし、口傳多し、

〔和泉草 三〕獨客

一獨客六ケ舗物也、何時も下座に居る物也、亭主ト諸事請取渡にも、手前モ能見ユル物也、客亭主共に挨拶可心得ナリ、